日本史とアジア史の一接点

――硫黄の国際交易をめぐって――

山 内 晋 次

1. はじめに

10世紀末から13世紀後半にかけての日宋貿易を通じて、日本産の硫黄がしばしば輸出されていた事実は、これまでも知られている。しかし、従来の日宋貿易史研究において、その流通を正面から論じた専論は管見の限りみあたらない。そこで本稿では、この「硫黄」という輸出品を主題にとりあげ、その流通からみえてくる新たな日宋貿易史像を提示してみたい。そしてさらに、アジア各地に残された硫黄貿易にかかわる史料をつなぎあわせることにより、東アジア海域～東南アジア海域～インド洋海域にまたがる「海域アジア」[1]という歴史世界のなかでその流通状況を概観し、「硫黄」というモノからみた日本史とアジア史の「接点」を具体的に考察してみたい。

2. 日本産硫黄の輸出開始とその背景

上述のように、日宋貿易において日本から宋へ硫黄が輸出されていたことは、すでによく知られている事実である。しかし、日本から中国への硫黄輸出がいつ開始されたのかという問題に関しては、研究史のなかでかならずしも明確に解決されていないように思われる。そこでまず、この輸出開始時期の問題と、その輸出が開始された理由を探ってみたい。

２．１．輸出開始時期の推定

日本の国際交流史において、遣唐使の継続的な派遣とその途絶、そしてその後の日宋貿易の展開の時期に重なる、700～1200年頃の日本・朝鮮・中国史料を通覧していくと、日本から中国への硫黄輸出に関連する記録が以下の７例みつかる。

【988年】入宋僧・奝然の宋・太宗への硫黄献上（約420キログラム）
〈『宋史』巻491・日本国伝〉

【1053 ～ 64年頃】大商人八郎真人の項にみえる「貴賀之嶋（キカイガシマ）」と「硫黄」
〈藤原明衡『新猿楽記』〉

【1069年】宋海商・陳詠による日本産硫黄の買付

---

[1] 本稿でもちいる「海域アジア」という地域設定については、桃木志朗他編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008、1～12頁参照。

〈成尋『参天台五臺山記』巻２・延久４年６月５日条〉

【1072年】宋海商・曽聚による日本産硫黄の買付

〈成尋『参天台五臺山記』同上〉

【1084年】宋政府による日本産硫黄の大量買付計画

〈『続資治通鑑長編』巻343・元豊７年２月丁丑条〉

【1093年】高麗により拿捕された宋人・倭人乗組み貿易船搭載の硫黄

〈『高麗史』巻10・宣宗10年７月癸未条〉

【1145年】宋・温州漂着の日本国賈人船搭載の硫黄

〈『建炎以来繫年要録』巻154・紹興15年11月丁卯条〉

これらの記録を一覧してまず注目されるのは、988年以前の硫黄の輸出記録がみられないという点である。このことから、遣唐使や９世紀から10世紀半ば頃にかけての唐・呉越との民間貿易では硫黄の輸出がおこなわれておらず、10世紀末から11世紀初頭頃の日宋貿易の開始時期になってはじめて、日本から中国に硫黄が輸出され始めたと推定することができる。では、なぜ日宋貿易の開始とともに日本産硫黄の輸出が始まるのであろうか。

２．２．宋における硫黄の用途

硫黄輸出が開始された理由をさぐるにあたって、おおきなヒントになるのは、宋における硫黄の用途の問題であると考えられる。先行研究によれば、宋代の中国では硫黄は、(a) 炬火・燃料、(b) 薬用・農薬、(c) 火薬原料などの用途に利用されていたと指摘されている[2]。これらの用途のなかで、(a) や (b) は、硫黄の燃焼作用・殺菌作用などを利用するために、微量成分としてそれが含まれるのみであったと推測され、わざわざ海を越えて日本からの大量輸入を必要とするほどその需要がおおきかったとは考え難い。そうすると、残る (c) の用途が問題となってくる。

そこで火薬の歴史を概観してみると、火薬は唐末９世紀頃の中国において、道家を中心とする練丹術のなかで硝石・硫黄・木炭が混合され、黒色火薬というかたちで発明されたと推定されている。そして、五代十国の混乱期をへて宋代になると、火薬の武器への利用が拡大していった。このような火薬の軍事利用の進展は、1044年に曽公亮によって編纂された軍事技術書『武経総要』にみえるかずかずの火薬武器からもうかがうことができる[3]。

以上のような火薬の歴史と、上述の日本産硫黄輸出の初見時期を考えあわせると、宋代中国における火薬武器の発展により生みだされた、その主要原料としての硫黄の大量需要を最大の背景として、日宋貿易の開始とともに日本から中国への硫黄輸出が始まった、と結論づけることができる。日本から輸入された硫黄が軍需物資として利用されていたことは、13世紀南宋の官僚・包恢の文集『敝帚藁略』巻１・禁銅銭申省状で、その「軍需」への供給が明記されていることからもわかる。

ただ、ここで、広大な中国大陸であれば硫黄も各地に産出するはずであり、わざわざ日本から舶載する必要などないのではないか、という疑問がわくかもしれない。たしかに、

---

[2] 山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、2003、252～253頁。

[3] 山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』山川出版社、2009、20～21頁。

現在の中華人民共和国の領域には、東北地域・雲南地域・中央アジア地域に大規模な火山群があり、その生成物である自然硫黄も内モンゴル自治区・雲南省・甘粛省・チベット自治区などの各地で産出する[4]。ところが、時間をさかのぼってみると、宋代にはそれらの火山が分布する地域は遼・金・西夏・大理などの国ぐにが支配する地域であり、とくに領土が圧迫された南宋の領域にはほとんど火山が分布しない。このことはつまり、北宋・南宋を通じて、宋代の中国ではあまり硫黄が産出されなかったということを意味する。しかし、このような硫黄産出状況のいっぽうで、火薬武器の利用は拡大していく。すると、その主要原料のひとつである硫黄の国内自給は当然不可能となる。このような矛盾の解決策として選択されたのが、宋代において急速に発展した海上貿易による海外からの硫黄の輸入という方策であった。そして、その輸入先のひとつとして選ばれたのが、火山国日本であったのである。

２．３．宋政府の日本産硫黄大量買付計画

このような火薬原料としての硫黄輸出という歴史状況を、より具体的に物語る事例として、上掲『続資治通鑑長編』巻343・元豊７（1084）年２月丁丑条の、

> 知明州馬珙言す、「朝旨に準えて商人を募り、日本国において硫黄五十万斤を市い、十万斤毎に一綱と為し、官員を募りて管押せしめんことを乞う」と。之に従る。

という記事が注目される。

この記録では、明州（現在の浙江省寧波）の知州から、商人を日本に派遣し、硫黄50万斤（約300トン）を買い付ける計画が提案され、神宗皇帝がそれを許可したことが述べられている。そして、さらにこの記録をみていくと、その買付は、商人１綱ごとに10万斤を担当するとされている。ここでいう「綱」とは、一般的に貨物運搬のグループをさすので、総計50万斤では、５綱（グループ）の商人たちを日本に派遣する計画であったことになる。

しかし、この買付計画がこのあと、実行されたのか、それとも中止されてしまったのか、その結末を物語る中国側の記録はみあたらない。そのため、これまでの研究史においてこの『続資治通鑑長編』の記事は、日宋貿易における日本産硫黄の輸出を記録した貴重な記事としてエピソード的に紹介はされるものの、結局はまったく孤立した記事として、とくに分析が深められることもなかった。

ところが、ひるがえって、日宋貿易に関する日本側の諸史料をあらためて読みなおしていくと、この『続資治通鑑長編』の記事と関連する可能性の高い、ある史料の存在に気づく。それは、平安末の詩文・文書例文集である『朝野群載』の巻５に収載されている、応徳２（1085）年10月29日付の陣定文である。

この陣定文では、大宰府から朝廷に、「大宋国商客」の王端・柳忿・丁載・孫忠・林皐らの来航が報告され、彼らの処遇が話しあわれている。平安期の貴族の日記や古文書などを通覧すると、宋海商の来航が大宰府より中央政府に報告される場合、記録に登場する海

---

[4] 李鴻超統編『中国礦物薬』地質出版社、1988、212頁。同書によれば、一部陝西省でも産出するようである。

商名はその貿易船の代表者である「綱首（綱主）」１名であるのが一般的である。ところが、問題の陣定文では、５人の宋海商名が記録されている。とすれば、この陣定文は、『続資治通鑑長編』が記録する、５人の綱首にひきいられた５グループの貿易船団の来航を伝えている可能性が高い。

以上のような、『続資治通鑑長編』にみえる硫黄買付計画と『朝野群載』の宋海商来航記事の１年８カ月ほどの比較的短い時間差や、買付計画の５グループの商人の派遣と陣定文の５グループの海商たちの来着報告の対応などを考慮すると、1084年の宋政府による日本産硫黄の大量買付計画は実行に移され、その事実をかすかに記録したのが問題の『朝野群載』の陣定文である可能性が高いのではなかろうか。

それでは、宋政府はなぜ突然に、1084年２月という時点で、総計300トンもの日本産硫黄の大量買付を計画したのであろうか。その300トンというおおきな数量から考えても、このときの硫黄の用途が、先述の宋代中国における硫黄の諸用途のうちで、火薬原料であったことはまずまちがいないであろう。そうすると、この買付計画がもちあがった時期に、火薬の緊急かつ大量の需要が発生したと考えられるが、そこで注目されるのが、当時の宋と西夏の国際関係である[5]。

11世紀前半、チベット系タングート族によって宋の西北に建国された西夏は、宋としばしば大規模な戦闘をくりひろげた。そして、問題の1084年の硫黄買付計画がもちあがった時期はまさに、1081年の「霊武の役」とよばれる戦闘を発端とする軍事的対立期のまっただなかにあった。ここでふたたび『続資治通鑑長編』所載の記事に注目すると、その巻342・元豊７年１月甲寅条に、当時蘭州で西夏軍と戦っていた将軍の李憲に対して神宗皇帝が､「弓箭･火砲箭百万有余」の配備を詔している。ここに「弓箭」とならんでみえる「火砲箭」はまさに、先述の『武経総要』にも掲載されている火薬武器である。そうすると、具体的な数量・内訳は不明ながら、この神宗皇帝の詔をきっかけとして、火砲箭の材料である火薬の臨時的な大量需要が発生したことになる。そしてそのことは当然、火薬の主要原料である硫黄についても臨時の大量需要が生まれたことを意味している。

ここであらためてこの神宗皇帝の詔の日付に注目すると、元豊７年１月甲寅（14日）であり、この日付は上掲の同年２月丁丑（８日）の硫黄買付計画記事とわずか23日の時間差しかない。このことから、ともに『続資治通鑑長編』にみえる神宗皇帝の火砲箭配備の詔と日本産硫黄の大量買付け計画は、連動している可能性が高い。つまり、皇帝の命により、西夏の侵寇に備えるための火薬武器の大量配備計画がもちあがり、火薬の主要原料である硫黄についても臨時的な大量需要が生じた。ところが、おそらく当時の宋政府が備蓄していた硫黄の量ではその需要を満たすことができなかった（あるいは、備蓄でなんとかまかなえたが、備蓄の追加補充が必要となった）。そこで、対日貿易の最大拠点であった明州を通じて日本産硫黄の緊急買付計画が策定された、という経緯であろう。このように、1084年の宋政府による日本産硫黄大量買付計画は、日本からはるかに離れた内陸アジアの西夏の動きとつながっていたのである。

5　山内晋次、注３著書、31～34頁。

3. 硫黄輸出と列島南辺の島

つぎに、目を日本列島内部に転じて、日宋貿易において日本から輸出された硫黄の産地の問題を考えてみたい。

3．1．薩摩硫黄島

8～11世紀頃の日本史料にみえる硫黄関連記事を通覧していくと、まず『続日本紀』巻6・和銅6（713）年5月癸酉条、『肥前国風土記』高来郡条、『延喜式』巻15・内蔵寮・諸国年料共進条などに、相模・信濃・陸奥・肥前・下野などの諸国における硫黄の産出やその朝廷への貢納がみえる。また、10世紀初めの深根輔仁『本草和名』巻4・玉石条では、「大宰より出ず」として、具体的な国名は不明ながら九州地域からの硫黄の産出が特記されている。さらに、先掲の11世紀半ばの文学作品・藤原明衡『新猿楽記』には、架空の大商人・八郎真人のとりあつかい商品のひとつに硫黄があげられており、その硫黄は彼の活動範囲の西端とされている「貴賀之島」とふかくかかわる商品であると推測される。

このように、日本の古代・中世史料には、列島各地からの硫黄の産出・貢納が記録されているが、日宋貿易時期の硫黄産地として私がとくに注目したいのが、最後の「貴賀之島」である。ここにみえる「貴賀之島」は、その当時の「日本国」の西の境界領域にある薩摩南方の島々を漠然とさす呼称として使われる場合と、「イオウジマ」という特定の島をさす場合があったようである[6]。私は後者の呼称としてのこの島を、現在の鹿児島県三島村に所属する硫黄島（薩摩硫黄島）であると推定している。鹿児島港からフェリーで4時間前後で到着する硫黄島は、周囲14.5キロメートル、人口110人ほどの小さな離島である。この島は、活火山・硫黄岳を中心に形成された火山島であり、その近海の海底に存在する巨大海底火山・鬼海カルデラの火口縁の一部が海上に突き出たものである。この硫黄岳の活発な活動により、硫黄島では現在でも日々硫黄が生成されており、1964年まで、その商業的採掘もおこなわれていた。そして、時代をさかのぼればこの島は、15世紀・朝鮮の申淑舟により著された対日外交マニュアル『海東諸国紀』や、16世紀・明の鄭若曽により編まれた日本研究書『籌海図編』などにも掲載されており、それらの著作はどちらも、その島を重要な硫黄産地として記録している。15・16世紀頃の硫黄島は、国際的に有名な硫黄産地であったのである。

ただし、14世紀以前の薩摩硫黄島に関する古い文字記録はほとんど残されていない。ましてや、その島での硫黄の産出を明確に記録した信頼しうる歴史書・古文書などは管見の限り皆無である。では、10世紀末から13世紀後半にかけての日宋貿易の時期におけるその島での硫黄の産出状況と、日本産硫黄の輸出との関連を、どのようにさぐっていけばよいのであろうか。

3．2．『平家物語』と薩摩硫黄島

ここで、注目したいのが『平家物語』[7]である。もちろん、『平家物語』はあくまでも文

6　永山修一「中世日本の琉球観」沖縄県文化振興会編『沖縄県史・各論編3 古琉球』沖縄県教育委員会、2010、594～595頁。

7　本稿では、梶原正昭・山下宏明校注『新日本文学大系44 平家物語・上』岩波書店、1991をテキスト

学作品であり、その叙述を歴史書・古文書などの史料と同等にあつかうことはできないであろう。しかし、上述のように日宋貿易期の薩摩硫黄島に関する歴史学的な史料がほとんど残存していない現状では、その文学的叙述をデータとして利用せざるをえない。そして以下に紹介するように、その叙述には非常に注目すべき内容が含まれているのである。ではなぜ、都を遠く離れた、まさに日本国家の辺境といえる薩摩硫黄島が『平家物語』に登場するのであろうか。それは以下のような事情による。

1177（治承元）年、平氏打倒の謀議が露見した「鹿ケ谷事件」がおこり、この謀議にかかわった人びとのうち、俊寛・平康頼・藤原成経の３人が、平清盛の命により薩摩の「鬼界島」に配流となった。この「鬼界島」こそ、現在の「硫黄島」であると考えられる[8]。彼ら３人が薩摩の「鬼界島」に配流されたことは、赦免により都に帰還した平康頼が後年著した仏教説話集の『宝物集』上巻の冒頭に、「治承元（二？）年の秋、薩摩国の島を出て、おなじき二（三）年の春、二たび旧里にかへりて」「鬼界が島の有様は、申ても無益と侍るべし」と、自身の体験にもとづいたと考えられる叙述がみえることなどからも、とくに疑うべきことではないであろう[9]。

『平家物語』では、まず巻２·「大納言死去」で、３人が配流された鬼界島の光景を、めったに船も通わず、数すくない島人は全身毛でおおわれ、色黒で牛に似ており、その言葉もわからない、農耕・養蚕もしないので米や絹などもない、などとしている。これらの叙述はもちろん、都を遠く離れた辺境の島の異界性を強調する表現手法であり、当時の島の実情を物語る叙述としてそのまま受けとることはできないであろう。ただ、この直後の「島のなかには、たかき山あり、鎮に火もゆ。硫黄と云物みちみてり。かるがゆへに硫黄が島とも名付たり」という叙述は、704メートルの主峰・硫黄岳が火山活動を続ける現在の硫黄島の景観とも一致し[10]、実際の光景にもとづいた描写である可能性が高い。そして、この叙述において、その島で硫黄が豊富に生成されていたという部分は、とくに注目される。

さらに、巻３の「有王」「僧都死去」などの箇所をみると、鬼界島にはときおり九州から商人の船が来航しており、俊寛は「山にのぼッて湯黄（硫黄）と云物をとり、九国（九州）よりかよふ商人にあひ、くひ物にかへ」というような生活をしていたと語っている。この俊寛の言葉はまさに、硫黄島と九州本土のあいだで硫黄交易がおこなわれていた状況を背景としたものであろう。12世紀後半の薩摩硫黄島はすでに、重要な硫黄産地のひとつとなっており、そこで産出された硫黄は商人によって九州本土に移出されていたと考えられる。このような状況は、上述の15・16世紀の朝鮮・中国史料に記録される硫黄産地としての硫黄島の状況ともつながるものであろう。

ここで叙述されているように、鬼界島と九州本土のあいだである程度恒常的な物流が

とする。

8　奄美大島の東に浮かぶ「喜界島」とする説もあるが、その島はサンゴ礁が隆起してできた島であり、後述のように「鬼界島」を火山島とする『平家物語』の記述には適合しない。

9　テキストには、『新日本古典文学大系40 宝物集・閑居友・比良山古人霊託』岩波書店、1993年所収の小泉弘・山田昭全校注の『宝物集』を利用した。平康頼の鬼海島配流については、同書巻末の山田昭全「宝物集解説」の527～528頁も参照。

10　私は2006年７月に現地を踏査し、その景観を確認している。

あったことは、巻２・「康頼祝詞」で、３人の流人が、藤原成経の舅・平教盛の所領「肥前国鹿瀬庄（現在の佐賀県佐賀市域にあった荘園）」からつねに衣食の供給を受けていた、とする叙述からも推測することができる。また、巻３・「少将都帰」で、赦免をこうむった平康頼･藤原成経の２人が、鬼界島を出て都に帰る途中、鹿瀬庄から「浦づたひ島づたひ」して備前・児島に到着したという叙述も注目される。この叙述からは、鬼界島→肥前・鹿瀬庄→関門海峡→備前・児島という九州西海岸と瀬戸内海とをつなぐ航路がうかびあがり、その航路は当時最大の日宋貿易の貿易港である博多ともつながっていたと推測される。

そうすると、これまでみてきた『平家物語』の叙述からは、産出地・鬼界島（硫黄島）から九州西海岸をまわって輸出港・博多に達する硫黄の海上交易ルートがみえてくる。上述の15世紀朝鮮の『海東諸国紀』所収「日本国西海道九州之図」には、硫黄島のすぐ南にある口永良部島あたりから博多の住吉津にいたる航路が書きこまれているが、『平家物語』の叙述を考慮すると、このような海上交易ルートがさらに古く日宋貿易の時代から存在した可能性を考えてもよいのではなかろうか。12世紀の硫黄島で産出された硫黄は、おそらく国内商人の船によって九州西海岸をまわって博多に運ばれ、そこからさらに宋海商の船に積まれて中国に輸出されていたと考えられる[11]。

以上のように、10世紀末あるいは11世紀初頭頃、日本から宋への硫黄輸出がはじまり、その硫黄は宋においておもに火薬の原料として利用されていた。そして、日本産の硫黄を利用して製造された火薬武器はときに、中央アジアの遊牧国家との戦争にも投入されていたと推測される。当時の日本の主要な硫黄産地と目される、列島南辺の小島・薩摩硫黄島の歴史は、「硫黄」というモノを介して、中国さらには中央アジアの歴史ともつながっていたのである。

4. 朝鮮半島・東南アジア・中央アジア・西アジアからの硫黄

これまで、日宋貿易における日本産硫黄の輸出状況を検討してきたが、宋代の中国史料やさらには西アジアの史料などを検索していくと、当時の中国が日本だけでなく世界の各地から広範に硫黄を集荷していた状況がみえてくる。

４．１．朝鮮半島からの硫黄

12世紀前半、北宋・徽宗皇帝の命により高麗に派遣された外交使節団の記録である徐兢『宣和奉使高麗図経』の巻23・雑俗・土産には、当時の高麗国内での硫黄の産出が記録されている。また、宋代諸制度の沿革を集成した『宋会要輯稿』の第199冊・蕃夷７・歴代朝貢では、1030（天聖８）年・1071（熙寧４）年などに、高麗国王から宋皇帝への朝貢品として硫黄が記録されている。これらの記録から、朝鮮半島からも宋代中国に硫黄が流れこんでいたことがわかる。

ただし、朝鮮半島の地質環境をみると、白頭山・済州島・鬱陵島などを除きほとんど火

[11] 16世紀に日明貿易や朱印船貿易で栄え、鉄砲の製作地としてもしられる大阪府の堺では、当時のものと推定される硫黄鉱石がはいった壺が発掘されている。そのような硫黄の現物が、今後、博多遺跡群でも発見されることを期待したい。

山の分布がみられないことから、火山生成鉱物である自然硫黄の産出はきわめて限定的であったと考えざるをえない。このことは、朝鮮王朝期に火薬原料としての硫黄が自給できず、日本から大量に輸入されていたこと[12]を考慮すれば、首肯できるであろう。とすれば、高麗王朝期の朝鮮半島における硫黄の産出量もきわめて限られたものでしかなく、その宋王朝への貢上量も、日宋貿易における輸出量と比べてはるかにすくなかったと考えられる。

4．2．東南アジアからの硫黄

現在の東南アジアにおける火山分布をみると、ユーラシア・インド・フィリピン海・太平洋の各プレートの境界となっているその地域では、インドネシア・フィリピンなどの島嶼部を中心におおくの火山が集中している。そして、これらの火山からは大量の硫黄が産出され、ジャワ島東部のイジェン火山などでは現在でも、硫黄の商業的採掘がおこなわれている。そこで宋代の史料をみるとやはり、13世紀前半の東南アジア貿易情報を集成した趙汝适『諸蕃志』の巻上・志国・闍婆国（インドネシア・ジャワ島）に、その国の物産（つまり中国への輸出品）のひとつとして硫黄があげられており、同様な記録は正史の『宋史』巻489・闍婆国伝などにもみえる。これらの史料から、宋代の海上貿易の幹線（日宋貿易はあくまでも支線にしかすぎない）であった対東南アジア貿易を通じて、おそらく日本からの硫黄よりも大量の硫黄が中国に舶載されていたと推定される。

4．3．中央アジアからの硫黄

北宋初期の10世紀末に編纂された地理書である楽史『太平寰宇記』の巻186・西戎７・悦般国には、５世紀前半の天山山脈中部から西部にかけて存在したその国での硫黄の産出と薬材としての利用が記録されている。この悦般国に関する情報は、宋代をはるかにさかのぼる南北朝期以降の諸史料にくりかえしあらわれている。このことから、中央アジアで産出される硫黄が、ある程度継続的に中国に輸入されていたことが推測される[13]。

ところが、現在私が検索しえた宋代史料の範囲では、当時の中国に中央アジア産の硫黄が輸入されていたことを記した確実な史料をみいだすことができない。しかし、のちの『元史』巻12・世祖本紀・至元20（1283）年10月壬寅条に、甘州の硫黄貢納戸の記録がみえることや、さらにのちの『大明一統志』巻37に甘州・粛州での硫黄の産出が記されていることから、中央アジア産の硫黄が宋代の中国に流れこんでいた可能性は考えてもよいであろう。ただ、その流入量については、ラクダやウマなどの背に積まれた陸路による交易であったと推測されることや、西夏がいわゆる「シルクロード」の幹線交易路を支配下に置いていた状況などを考慮すると、日本や東南アジアから一挙に大量に舶載されてくる状況にくらべて、はるかに限られた量であったと推測される。

4．4．西アジアからの硫黄

世界の火山分布をみると、西アジアからアフリカ北東部にかけての地域にも、集中的に

12　小葉田淳「中世における硫黄の外国貿易と産出」『金銀貿易史の研究』法政大学出版局、1976。

13　松田壽男「戎塩と人参と貂皮」日比野丈夫他編『松田壽男著作集3 東西文化の交流Ⅰ』六興出版、1987、333頁では、天山で産出した硫黄が青海→四川ルートで中国に流入したと推定している。

火山が分布している。『旧約聖書』のヨブ記・イザヤ書・エゼキエル書などにみえる硫黄の記録からは、それらの火山から産出された自然硫黄が古くから医薬などに利用されていたことが推測される。

さて、この西アジア地域で産出される硫黄と宋代中国とのかかわりをめぐる興味深い史料が存在する。それは、近世ペルシアの詩人・旅行家として著名なサアディーが1258年に著した『薔薇園（グリスターン）』と題される作品である。その第３章「満足の徳について」の物語21では、各地を放浪していたサアディーがペルシア湾の入口に近い貿易の要衝・キーシュ島で出会った老商人とかわした会話が記されている[14]。この会話のなかで老商人は、人生最後の商用の旅の計画について語り、その旅の一環として「ペルシア産の硫黄を支那へ持って参りたい。支那では値がよいということである」と述べている。このサアディーの記録により、13世紀のペルシア湾地域からもおそらく海路で中国に硫黄が輸出されており、なおかつそれは利幅のおおきい商品であったことがわかる。

また、南方の紅海地域に目を転じると、11世紀半ばから15世紀頃にかけて、カイロ・フスタート～紅海～アラビア海～インド洋を結ぶ海上交易で活躍した、カーリミー商人とよばれるムスリム商人のグループにかかわる史料に注目すべきものがある。それは、13世紀イエメンのラスール朝第２代スルタン・ムザッファルの時期の『壮麗なるムザッファルの時代におけるイエメンの統治と法律そして諸慣習に関する知識の光』と題された税務行政記録である。その記録の「エジプトの諸地域から到来する諸商品」という項目では、カーリミー商人の手によりエジプトからイエメンのアデン港税関を介してインド向けに積み出される商品のひとつとして、硫黄が記録されている[15]。

この硫黄輸出の記録とかかわって、当時のムスリム海商たちの交易の大動脈がインドを中継点として中国と西アジアとを結ぶものであったことや、中国に赴いたカーリミー商人たちの記録が残されていることなど[16]を考慮すれば、その商人たちによってインドに輸出された硫黄がさらに中国まで転売された可能性は高いのではなかろうか。上述のサアディーが記録した13世紀のペルシア湾地域における硫黄の対中国輸出の事例から考えても、同時期の紅海地域からも同様に、中国に硫黄が輸出されていた可能性は十分に考えられよう。

これまでみてきたように、宋代の中国は日宋貿易を通じて日本産の硫黄を輸入するだけでなく、朝鮮半島・東南アジア・中央アジア・西アジアなどのアジア各地から広範に硫黄を輸入していた。宋代以降、火薬の主要原料としてその需要を大幅に拡大した硫黄は、その時代に格段に発展した東シナ海からインド洋にまたがる海上貿易によって、船で一挙に大量に中国にもたらされた。このような海上貿易を通じて中国に流れこんだ硫黄を「海の硫黄」と名づけてみたい。これに対して、中央アジアからは、宋代のはるか以前から陸上貿易を通じて硫黄が中国にもたらされており、宋代の海上貿易の大発展以前は、この陸上

14　蒲生礼一訳『東洋文庫12 薔薇園 イラン中世の教養物語』平凡社、1964、201～202頁。

15　栗山保之「13世紀の紅海交易―エジプトからイエメンへ輸出された商品の分析を中心に―」『東洋学報』90-2、2008、8・13頁。

16　家島彦一「カーリミー商人による海上交易」『海域から見た歴史―インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会、2006。

ルートが硫黄の重要な流入ルートであったと考えられる[17]。この陸上ルートで中国にもたらされた硫黄を「陸の硫黄」とよんでみたい。ただし、この「陸の硫黄」はすくなくとも宋代以前にあっては、医薬原料としての需要が中心であったと考えられ、なおかつその運搬方法もラクダやウマによっていたと思われるので、輸入量としては「海の硫黄」にくらべてはるかに少量であったと推測される。

そうすると、アジア規模での硫黄の流通･貿易という観点からみた場合、宋代の中国は、「陸の硫黄」から「海の硫黄」への重要な転換点として位置づけることができる。そしてさらに、宋代以降の中国が海のルートを通じてアジアの東西から広範に硫黄を吸収したことにより、日本列島から西アジアにかけての広大な「海域アジア」に、中国を核とする「硫黄の道 The Sulfur Road」とでもよぶべき硫黄の広域流通ルートが形成されたとみることができる。すなわち、この「硫黄の道」を通して、先述の日本列島南辺の薩摩硫黄島の歴史は、はるかに離れた西アジアの歴史ともつながっていたのである。

5. おわりに

以上、「硫黄」という具体的なモノの流れに注目することにより、日宋貿易の新たな一面や、これまでほとんど気づかれてこなかった日本史とアジア史の「接点」「つながり」を考察してきた。そして、この考察を通じて、いくつかの研究課題がみえてきたように思う。

それはたとえば、従来主流となっている火器の形態･性能の変化をたどる研究とならぶ、その製作・使用を可能にした原材料の流通や支配の歴史的変化をたどる研究の必要性である。また、日宋貿易の時期以降、火薬原料として大量の硫黄を中国に輸出した中世の日本が、なぜ自国内で火薬を製造・使用しなかったのかという疑問[18] なども、今後の重要な課題として浮上してくるであろう。

本稿では､「硫黄の道」という仮説的枠組を提示することにより､広域的な歴史の「接点」「つながり」を浮きあがらせたが､このような「接点」や「つながり」は、これまでの「日本史（国史)」研究の枠に閉じこもっていては、けっしてみえてこない。また、ほぼ日本･

---

[17] ただし､宋代以前のいくつかの本草書には､東南アジア産の硫黄をさすと考えられる記述があり（山内晋次「海域アジア史研究のポテンシャル―硫黄交易と航海信仰を素材として―」『新しい歴史学のために』265、2007、15～16頁)、そのような硫黄はおそらく、おもに海路により中国にもたらされたのであろう。しかし､その舶載量は火薬武器が発展した宋代以降とくらべてはるかにすくなかったと推測される。

[18] 榎本渉『東アジア海域と日中交流―九～一四世紀―』吉川弘文館、2007、120～121頁では、1309（至大2）年の慶元（現在の浙江省寧波）でおこった倭商暴動事件が紹介されている。そして、そこで引用される「慶元路玄妙観碑銘」には、元の吏卒の侵漁に激怒した倭商たちが「賚（齎？）す所の流黄等の薬を持って城中を火く」と記されている。この記録をみると、日元貿易にかかわる倭商たちが硫黄の強力な発火作用を知らなかったわけではないことがわかる。もちろん、火薬を製造するためには当時の日本国内で産出されなかった硝石が不可欠であるが、それは逆に大陸からなんらかのルートで入手すればよかったはずである。しかし、すくなくとも16世紀以前に、火薬製造のために日本へ硝石輸入がおこなわれた記録をみいだすことはできないのではなかろうか。

朝鮮半島・中国の範囲に限定されている観がある現在の「東アジア」史研究[19] をもってしても、ほとんどみえてこないであろう。従来の研究の枠組みを乗り越えて、よりダイナミックに歴史の「接点」や「つながり」をとらえていくためには、個々の研究者のいっそうの努力や意識の改革は当然のことであるが、むしろそれ以上に、現在の日本の歴史学界において依然として墨守されている、日本史・東洋史・西洋史という縦割りの研究区分の大胆な改編が、ぜひとも必要であろう。

[19] 山内晋次「『東アジア史』再考―日本古代史研究の立場から―」『歴史評論』733、2011。